HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	琉球沖縄における青年会エイサーの変容とその背景 ： 北谷町謝苅区青年会を中心に
Author(s)	仲濱, 会人
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	学士(文学)
Issue Date	2021-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/80596
Type	bachelor thesis
File Information	2020Nakahama.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学　文学部
2020 年度　卒業論文

琉球沖縄における青年会エイサーの変容とその背景

～北谷町謝苅区青年会を中心に～

北海道大学　文学部
人間システム科学コース　地域科学研究室
指導教員：宮内 泰介

学籍番号：01172142
氏名：仲濱 会人

提出日：2020 年 12 月 21 日

目次

1. はじめに 3

1-1. 研究の背景と目的 3
1-2. 調査対象および研究方法 3

2. エイサーの概要 4

2-1. 解釈 4
2-2. 起源・歴史 4
2-3. 現在のエイサー 5

3. 北谷町謝苅区青年会におけるエイサー 6

3-1. 謝苅区の概要 6
3-2. 謝苅青年会の歴史 6
3-3. 謝苅青年会におけるエイサー 7
3-3-1. 青年会活動 7
3-3-2. エイサー演舞 7
3-3-3. 他青年会との関係 9

4. 青年会と地域社会 9

4-1. 青年会が地域社会に果たす役割 9
4-2. 青年会が持つ地域間交流のパイプ 10

5. エイサーの変容 10

5-1. 戦前～宗教的儀礼から芸能・イベントへ～ 10
5-2. 戦後～芸能・イベントとしての変容～ 13
5-3. 青年会と地域社会の変容 14

6. エイサーの課題と今後 15

7. おわりに 16

7-1. まとめ 16
7-2. 謝辞 17

8. 引用・参考資料 18

9. 付録「謝苅エイサーの楽曲」 20

9-1. 北谷村(ちゃたんむら) 20
9-2. 仲順流(ちゅんじゅんなが)り 20
9-3. 久高(くだか) 20
9-4. 花ぬ風車(はなぬかじまやー) 21
9-5. ダイサナジャー 21
9-6. 今帰仁城(なちじんぐしく) 21
9-7. テンヨー節(ぶし) 21
9-8. エイサー頭(がしら) 22
9-9. 謝苅イマサンニン(じゃーがる) 22
9-10. 唐船(とうしん)ドーイ 23

1. はじめに

1-1. 研究の背景と目的

エイサーは沖縄に伝わる伝統芸能の一つで、一般にヤマト（日本）の盆踊りに相当するものといわれている。

現在のエイサーは主に各地域の青年会によって演舞され、旧盆の夜になると地域内を踊りながら練り歩く（道ジュネー）。エイサーの型はそれぞれの地域や青年会の間で異なり、使用する太鼓や衣装の種類も様々である一方で、全く違う地域でも一部同じ楽曲を使用していたり、ロゴマーク（青年会旗のデザイン）が類似していたりといった共通点が見られる場合もあり、沖縄の各青年会は相互に大きな影響を与え合いながらエイサー継承と創造に尽力してきたものと考えられる。

かつては先祖霊を送迎する宗教的儀礼として踊られたエイサーだが、近年では旧盆になると地元青年会による道ジュネーを見るべく地域住民が路傍に集まったり、沖縄島全域の青年会が勢揃いして大勢の前で踊りを披露する「全島エイサーまつり」に代表される団体同士の演舞対決の場が登場したりと、イベントとしての要素も強くなっている。

本研究の目的は、戦後特に積極的に新たなエイサーの創造を行ってきた北谷町謝苅区青年会を中心に、近年における青年会活動やエイサー演舞の特徴、青年会・エイサーと地域社会との関係性を調査した上で、エイサーが現在のような形にまで変容を遂げた歴史的背景について明らかにし、今後のエイサーの発展についての考察を行うこととする。

1-2. 調査対象および研究方法

主な研究対象地とするのは沖縄島中部・沖縄県中頭郡北谷町の謝苅地区を拠点にエイサー活動を行う北谷町謝苅区青年会（以降、謝苅青年会と呼ぶ）である。

まずはエイサーに関して文献調査を行い、基本的な知識を確認する。文献からある程度の情報が得られた時点で実際に沖縄県へ出向き、聞き取り調査を行う予定であったが、今年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響で対面での調査活動を断念[1]。すべてリモートで取材を行うこととなった[2]。

リモートでの取材調査では昨年まで謝苅青年会の地謡として活動を行っていた民謡歌手の松田一利さん、沖縄市のエイサー関連の展示施設「エイサー会館」に学芸員として勤務する眞榮平剛士さん、沖縄エイサー研究部代表の島袋幸司さん、北谷町謝苅区自治会長の徳里徹さんにご協力いただいた。調査内容として主に松田さんからは謝苅青年会の活動について、眞榮平さんと島袋さんからは戦前から現在に至るまでのエイサーや青年会の歩みについて、徳里さんからは北谷町や謝苅区の大まかな歴史についてそれぞれ取材を行った。

---

[1] この他 2020（令和 2）年 9 月 13 日～15 日に開催予定であった第 65 回全島エイサーまつりで実際のエイサー演舞を鑑賞する参与観察を行う計画も立てていたが、こちらもコロナ禍の影響でイベント自体が中止となってしまい、叶わぬものとなってしまった。

[2] いずれも対象先の意向により、メール文面にて調査を行った。

2. エイサーの概要

2-1. 解釈

エイサーは先述の通り、ヤマトの盆踊りに相当するものであるという端的な表現で説明されることがあり、「念仏踊り」が変形したものと考えられている。そんなエイサーは古くから沖縄各地で旧盆の時期に踊られてきた。

沖縄のお盆（旧盆）は旧暦 7 月 13 日～15 日の 3 日間で行われ、現地の言葉では「七月（しちぐわち）」あるいは「御精霊（うそーろー）」と呼ばれる。旧盆初日は先祖霊をお迎えする御迎（うんけー）の儀式を執り行う日で、2 日目（中日（なかびー））は仏壇のある親戚の家へお中元をもって挨拶回りをする日。そして最終日は先祖霊が天へ戻る日で、各家庭では日が暮れた後に御送（うーくい）の儀式が行われる。

3 日間の旧盆期間中、地域に帰って来た先祖霊を歓迎する意味も込めて盛大なエイサー演舞が部落ごとに地元青年会によって行われ、部落内を踊り歩く道ジュネーが沖縄独自の風物詩となっている。

エイサーは大太鼓、締太鼓（小太鼓）、パーランクー（手持ち太鼓）、歌三線を担当する地謡（じかた）、京太郎（ちょんだらー）と呼ばれる道化役などによって構成される（唐木 2010）が、地域によっては太鼓を全く使わない手踊りで行われる場合もあり[3]、多種多様である。

2-2. 起源・歴史

エイサーの正確な起源・由来については諸説あり、いまだ判然としないが、1603 年に首里に滞在した浄土宗の僧・袋中（たいちゅう）が、布教のために現地で念仏踊りを広めたことから始まったとする説が最も広く語られている（宜保 1997,井谷 2014）。これが琉球の王家・貴族の間に普及していき、次第に独自の仏典踊りの形態へと発展、各地へ伝播していったとされる[4]。

エイサーという名称については演舞中に挿入される「エイサー、エイサー、ヒヤルガエイサー」という囃子言葉から来ているとされている。この囃子言葉について沖縄学の父と呼ばれる民俗学者の伊波普猷（いはふゆう）[5]は、琉球王朝時代の古歌謡集『おもろさうし』に出てくる「ゑさおもろ[6]」という語が由来であるとしており、この説が長年支持され続けてきた。しかしながら、近年になって「エイサーは盆の芸能であるが、『ゑさおもろ』が盆に歌われた証拠はない」「エイサーのもととなった念仏歌はヤマトから伝来したものであるとすれば、琉球に

---

[3] 手踊りは太鼓のない時代から受け継がれるエイサーの原点ともいわれている。この手踊りを主体とした演舞が行われる地域としては沖縄島北部の本部町や今帰仁（なきじん）村、名護市などが挙げられる（小林 2010,小林・小林 2002・2013）。

[4] 「沖縄全島エイサーまつり実行委員会オフィシャルサイト」<https://www.zentoeisa.com/>より。

[5] 1876（明治 9 年）3 月 15 日、那覇生まれ。1906（明治 39）年に東京帝国大学言語学科を卒業後、琉球の言語史、文化史の研究に大きく貢献し、特に『おもろさうし』を中心とした琉球の古代史、古語、古俗などの実証的研究を行った。1947（昭和 22）年 8 月 13 日、満 71 歳にて没。

[6] 「ゑさおもろ」の「ゑさ」は集団舞踊に調和する掛け声であり、「おもろ」は「歌謡」という意味を持つ。

伝わる歌謡集である『おもろさうし』との直接的関係は見出せない」などといった指摘も出ており（塚田 2019:43）、エイサーの語源については今なお議論が続いている。

発生当初のエイサーは先述の通り先祖供養を目的として行われていたものであり、仏教の教えやお盆の由来を歌った内容の歌を使用していた。その後、明治中期から昭和初期にかけてこのような念仏歌を歌い踊る念仏エイサーが全琉に広がっていったが、その頃には既に芸能的性格を強めたエイサーも見られるようになっていた（詳しくは「5-1.戦前～宗教的儀礼としての変容～」で取り上げる）。

これに加え、近代化や風俗改良[7]によって毛遊び[8]の伝統が崩れた結果、歌・踊りにつぎ込むエネルギーがエイサーに転化集中したことや、那覇に商業演劇が生まれた際に民謡をアレンジした歌劇や舞踊などが流行し、新たな民謡ブームが起こったという風潮も相まって、エイサー演舞で用いられる念仏歌は楽しい雰囲気の歌に姿を変えてしまい、大衆向けの民謡を取り入れる例も顕著になってきた。地域の青年会がエイサーに携わるようになったのもこれと同時期であると考えられる。このことについて宜保（1997:41）は、「原型を保存することより新たな形態を創造していくことを選んだ結果がかえって今日のエイサーの活力を生み出すきっかけになった」と指摘している。

2-3. 現在のエイサー

近年のエイサーは芸能あるいはイベントとしての要素がより一層色濃くなっている。全島エイサーまつりに代表されるエイサーの祭典が活発に行われるようになり、青年会同士の見ごたえある競合も醍醐味の一つになっている。

楽曲に関しても民謡の枠を超えた沖縄ポップスを使用したり、独創的な衣装を身にまとった創作エイサー[9]が披露されたりと、革新的な特徴を持ったものも見られるようになり、幅広い層に親しまれる芸能になりつつあるようだ。

さらに他地域へ移住した沖縄県系人あるいは彼らの子孫が現地でエイサーを踊りはじめ、ヤマトあるいは海外へとその広がりを見せている（久万田 2011:230-237）。

直近で 2020（令和 2）年には新型コロナウイルス感染拡大の影響でエイサーナイト 2020 や第 65 回沖縄全島エイサーまつりなど、目玉のイベントが次々に中止となったことから、去る 9 月 27 日に代替イベントとして「俺たちの旧盆はまだ終わってない」というキャッチ

---

7 琉球藩時代までの風俗を後進的なものとし、沖縄を日本と同化させる目的で行われた。これによって多くの伝統的営みが禁止・制限され、生活のあらゆる面に影響が生じた。（琉球新報社編 2003）

8 夕刻すぎに若い男女が集まり、歌や踊りなどで交流を深めた会合。前近代の沖縄の平民男女が結婚相手を探す唯一の手段であり、自由な恋愛の場であった。かつては那覇・首里を除く沖縄各地で盛んに行われたが、明治 30 年代以降活発化した風俗改良運動の影響もあって戦後までにはほとんど姿を消してしまった（井谷 2013）。

9 創作エイサーの例として、真境名佳子によるパーランクーエイサー、宮城美能留による民俗芸能エイサー、南條喜久子によるバレエエイサー、テイコ与那覇による空手エイサーなどがある（宜保 1997）。

コピーのもと、リモートエイサー祭が YouTube にて生配信された。

3. 北谷町謝苅区青年会におけるエイサー

3-1. 謝苅区の概要

北谷町は沖縄島中部、中頭郡に属する人口約 2 万 9 千人[10]の町である。面積 13.93m² のうち米軍基地が全体の 52.3%にあたる 7.29m² を占めているため、残りの 6.64m² の中に町民が暮らしている。戦後、町内は大きな変遷を遂げながらも、遊び処[11]であったかつての面影を今に伝える芸能としてエイサーが大切に守られ、各部落の青年会がよりインパクトのあるエイサーを追求してしのぎを削っている。

本論文で主に取り上げる謝苅青年会の地元・謝苅区は、北谷町内を南北に貫く国道 58 号よりやや高台に登った所にあり、正式な行政区名でいえばおおむね字吉原の南部にあたる地域を指す。同地区には約 2 千人[12]が暮らしており、住民の憩いの場・謝苅公園からはアメリカンビレッジに代表される商業施設やリゾートホテルなどが立地する沿岸の美浜区を一望できる。

3-2. 謝苅青年会の歴史

謝苅青年会は 1950 年代後半に誕生した謝苅 2 区青年会の流れを組む青年会である。1980（昭和 55）年、今までの北谷村に町制が施行されて北谷町となり、町内の行政区が大幅に編成された際、現在の謝苅青年会の体制へと移行した[13]。

謝苅 2 区青年会時代には、当時地謡として活動していた・松田弘一[14]が入場曲として『北谷村』を作詞・作曲している。同曲は現在に至るまで沖縄県内で広く親しまれる民謡曲

---

10 2020（令和 2）年 11 月末現在。北谷町公式ホームページ掲載「住民基本台帳法による世帯人口表」<http://www.chatan.jp/smph/choseijoho/tokei/jinko.html>より。

11 毛遊びはエイサーやカチャーシー（お祝いの席で歌い踊られるテンポの速い曲）等の歌舞を産み育てた母胎であった（井谷 2013）。「遊び処」と呼ばれた戦前の北谷では北谷トンネル（現存せず）や砂辺部落の広場などで盛んに毛遊びが行われ、そこで歌われた民謡が現在の北谷町内の青年会によるエイサー演舞の際にも用いられている（沖縄市音楽資料館おんがく村編 2018）。

12 2020（令和 2）年 11 月末現在。北谷町公式ホームページ掲載「住民基本台帳法による世帯人口表」<http://www.chatan.jp/smph/choseijoho/tokei/jinko.html>より。

13 徳里徹さんへの取材調査（メール文面にて 2020 年 11 月 3 日実施）より。

14 1947（昭和 22）年 5 月 23 日、北谷町（当時は北谷村）字吉原生まれ。父の影響で歌三線に興味を持ち、16 歳時分から 10 年間謝苅エイサーの地謡を担当。1968（昭和 43）年には津波恒徳に師事したのち、嘉手苅林昌のもとでも稽古を積んだ。地元の先輩から習った毛遊び唄や古謡を多く歌いこなすのみならず、ユーモアあふれるキャラクターも相まって舞台やテレビでも人気を博した。代表作品（作曲）に『島情話』『あかばんた』『華ぐるま』『じんだま』『恋小花』『結まーる』『ゆしよーゆし』『毛遊び千鳥』など。2019（令和元）年 11 月 6 日、不整脈のため満 72 歳にて没。

の一つとなり、それとともに同青年会のエイサー演舞が謝苅以外の人々からも高く評価されるようになった。以降、男性のスピード感溢れるダイナミックな踊りと女性のしなやかさ映える踊りで定評を得る。

さらに平成に入ると松田弘一直接の弟子である松田一利[15]によってオリジナル楽曲『エイサー頭(がしら)』が制作され、地域住民のみならず県内外のエイサー愛好家の間でも絶大な支持を得た。

3-3. 謝苅青年会におけるエイサー

3-3-1. 青年会活動

山城（2007:19）では、「沖縄の集落公民館は地縁・血縁結合によってシマ[16]社会の生産、労働、文化、子育て、教育など、人間の生存や生活を支える総合扶助的な関係としても機能している。そのような集落の共同関係、ユイマール[17]が公民館という場・空間と一体化した形で営まれている」と述べられている。そういった意味で沖縄のシマ社会は、ヤマトの典型的な地縁団体である町内会・自治会と類似していながらも、独特の個性を兼ね備えたものであるといえよう。

青年会では地域社会における文化的営みとして町内やイベントでの演舞を通してエイサーの継承・創作をすることに力が注がれることはもちろんだが、特に謝苅青年会に関しては 10 代から一番上では 50 代という幅広い年齢層が在籍するため、若手育成にも力を入れている。若いメンバーたちにとっては、先輩方から学校で教えてくれないことをたくさん学べる場でもある。先輩方を敬うということを徹底的に叩き込まれるので、いざ社会に出て働きに出ると上の方々に可愛がられる人が多い[18]。

このような後輩育成の他、同青年会は地域の清掃などの奉仕活動も行っており、自治会長と連携した地域交流も積極的に行っている。

3-3-2. エイサー演舞

エイサーが大衆芸能として見られる今日では、その地域で古くから歌い継がれる歌に加え、流行り歌やオリジナル曲といった新しい楽曲を取り入れる青年会も多い。各青年会で用いられるエイサー楽曲は年々多様性を増しており、近年では THE BOOM や BEGIN など

---

15 1976（昭和 51）年 11 月 4 日、北谷町（当時は北谷村）謝苅生まれ。16 歳で謝苅青年会に入団。故・松田弘一に師事して本格的に唄三線の道へ。2007（平成 19）年にソロ CD デビュー。これまでに 4 枚のソロアルバムを発表。2019（令和元）年に同青年会の地謡を引退したのちも歌手として活動を続ける。オリジナル楽曲に『命(ぬち)の花(ぬ はな)』『白雲流(しらくむなが)りてぃ』『ありが姿(しがた)』など。

16 沖縄では村や部落のことを「シマ」と呼ぶ。

17 シマ社会の沖縄に古くから根付く共同作業・相互扶助の精神のこと。ちなみに「ユイマール」はウチナーヤマトグチ（戦後になって琉球語と日本語が混合してできた新しい言語）であり、正確なウチナーグチ（琉球語）では「ゆーマール」という。

18 松田一利さんへの取材調査（メール文面にて 2020 年 10 月 22 日実施）より。

による沖縄ポップスを用いる事例も見られるようになった。

謝苅青年会はそんな中で見ても昔ながらの民謡からオリジナルの創作歌まで、幅広い特徴を持った楽曲を積極的に取り入れているエイサー団の一つといえる。同青年会がエイサー演舞の際に演奏する楽曲は表 1 の通りである。

【表 1】謝苅エイサーの楽曲（演舞順）

順	曲名
1	北谷村（作詞・作曲／松田弘一）
2	仲順流り
3	久高
4	花ぬ風車
5	ダイサナジャー
6	今帰仁ぬ城
7	テンヨー節
8	エイサー頭（作詞・作曲／松田一利）
9	謝苅イマサンニン
10	唐船ドーイ

（「エイサー OKINAWA 北谷謝苅編（DVD）」をもとに作成）

このうち、『仲順流り』『久高』『唐船ドーイ』はエイサー曲として特に著名なものであり、ほとんどの青年会で採用されている楽曲である。各楽曲の詳しい歌詞と解説は巻末の付録に記載するが、謝苅青年会オリジナルの楽曲についてのみこの場で簡潔に言及しておきたい。

入場曲の『北谷村』は全島エイサーコンクール（全島エイサーまつりの前身イベント）で優勝するために、当時地謡であった松田弘一が作詞・作曲をしたのものである。松田一利によると、沖縄のエイサーでオリジナル入場曲を作ったのは謝苅青年会が初めてだという[19]。

この他、8 曲目の『エイサー頭』は平成時代にオリジナル曲として新しく取り入れられたものであり、9 曲目の『謝苅イマサンニン』は嘉手納町千原エイサー保存会[20]で用いられている『イマサンニン』という楽曲を取り入れ、謝苅風にアレンジしたものである。

---

19 『北谷村』が作られたのは松田弘一が 21 歳時分の 1968（昭和 43）年のこと。ちなみにこの楽曲は松田の作詞・作曲処女作でもある（「松田弘一・特別インタビュー 1 [毛遊び]編」<https://ryuqspecial.ti-da.net/e1755430.html>より）。その後、謝苅と隣接する栄口区青年会の『栄口節』をはじめ、各地の青年会でも謝苅に対抗すべくオリジナルの入場曲が制作された。

20 歴史は古く、1820 年頃に始まったとされるエイサー団。男性のみで踊るという特徴があり、『仲順流り』で歌詞の前に南無阿弥陀仏という仏教用語が歌われるのも千原エイサー独自のものである。

3-3-3. 他青年会との関係

エイサーを通した青年会同士の交流にトゥイケー[21]と呼ばれるものがある。これは演舞曲や踊りの型の交換や、年ごとにお互いの地域を訪ねてお互いのエイサーを見せ合うことを指し、沖縄島中部で特に広く分布する習慣である（沖縄市企画部平和文化振興課編 1998）。

謝苅青年会でも 2000 年代頃までは千原エイサーと年に一度エイサーを披露し合う席が設けられていた。一年ごとに謝苅が千原まで足を運び、その翌年は千原が謝苅に来てといった感じで交流を行っていたという。先述の『イマサンニン』も千原エイサーとのトゥイケーを通して謝苅に伝わった楽曲であると考えられる。この他にも青年会メンバーで他の青年会の練習を見に行ったり、飲み会を開催したりという交流が頻繁に行われていたが、謝苅に関しては近年そういった芸能の交流がほとんど見られなくなったという[22]。

しかし他地域に焦点を当てて見れば、沖縄県内の市町村の多くには青年会同士の連合組織が存在しており、北谷町の隣町・沖縄市でも 1976（昭和 51）年に市内青年会で組織される「沖縄市青年団協議会」が結成され（与那嶺 2005）、現在でも継続的に活動が行われている。これは各自治会・青年会の連携強調を図りその助長発展に努めるとともに、各自治会・青年会間の親睦交流を図りながら様々な活動を通して地域の発展と街づくりに貢献することを目的とした会合で、具体的な活動内容として例えば自治会や行政主催のイベントへの参加や青年会対抗の野球大会などを自主的に行っている[23]という。

このように、現在の青年会はただ仲間内でのみエイサーの発展に尽力するだけでなく、他地域の青年会同士で様々な活動を通して交流や親睦、連携を図りながら、それぞれの地域を盛り上げるための取り組みも行っている。

4. 青年会と地域社会

4-1. 青年会が地域社会に果たす役割

山城（2007:57）によると、2006（平成 18）年現在、沖縄県内で確認できた青年会は 421 団体であり、部落ごとに存在しているという。それらの青年会について同氏は、「①県や市町村の上部組織がたとえ弱体化しても、字青年会がシマ社会という基盤を持ち続ける限り、沖縄の青年会自体に大きな変化をもたらさない」こと、「②エイサーが集落の住民に『我々の』民俗芸能として認識され、定着することが前提となって、それが地域との結びつきの媒介となっている」こと、「③たとえ青年会が衰微し消滅しても、集落というシマ社会がある限り、青年会再生の道は用意されている」こと、「④市町村青年団の役割は、各集落の青年会と連携を取りながら青年主催の行事を開催し、一方で集落青年会の活動が弱体傾向にある市町村では、代わりに地域課題に応える取り組みを行っている」ことの 4 点を共通点として挙げている（山城 2007:57-68）。

上記項目①・②から、青年会は沖縄のシマ社会を維持することはもちろん、その仕組みを

---

21 ウチナーグチ（琉球語）で「取り替え」を意味する語。
22 松田一利さんへの取材調査（メール文面にて 2020 年 10 月 22 日実施）より。
23 眞榮平剛士さんへの取材調査（メール文面にて 2020 年 10 月 1 日実施）より。

より強固にすることに一役買っていることが分かる。また、青年会によって行われるエイサー演舞を鑑賞することで地域住民同士の交流も深まり、地域全体に一体感が生まれるのである。

項目③について一つ具体例を挙げると、北谷町内にも諸事情により青年会活動が滞っており、エイサーの休止を余儀なくされている部落が存在している。しかし、決してそのエイサーが完全に消滅してしまったというわけではなく、事情が変わればいつでも活動を再開できるような準備が住民たちによってなされているのだという（沖縄市企画部平和文化振興課編 1998）。

項目④について例えば、沖縄島北部の大宜味村青年団協議会では、夏祭りに来られない高齢者のために「エイサー部落まわり」を行い、地域が抱える高齢化問題に対応しているという（山城 2007）。

4-2. 青年会が持つ地域間交流のパイプ

沖縄では複数の青年会が合同でエイサー演舞を行う光景もしばしば見られる。例えば、謝苅青年会でも隣接する栄口区と沖縄市南桃原区の青年会と共に地域内の広場に集まって毎年合同でエイサー演舞を行うという[24]。場合によってはおーらせー（ガーエー）[25]が始まる時もあり、青年会同士の競合に住民たちは手に汗握る。青年会はこのようにして部落住民間の団結力や近隣部落との憩いの場を提供する役割も担っているのである。

このような合同でのエイサー演舞は青年会メンバーのみならず、観衆である地域住民同士の交流の場にもなる。この場合、異なる地域間での交流を図る良好なチャンスにもなりうる。

また、謝苅青年会をはじめとして沖縄県内にはエイサー演舞のみならず、街頭でのボランティア活動にも力を入れる青年会が多く存在する。ゴミ拾いや花壇整備などといった地域内の環境維持活動等を行いながら道行く住民への声かけをすることで、青年会メンバーが地域住民にとっても親しみやすい存在となり、そこからより気持ちの良い交流の花が咲いていくのである[26]。

5. エイサーの変容

5-1. 戦前～宗教的儀礼から芸能・イベントへ～

ここでは現在の謝苅青年会が発足する以前からのエイサーの変容について取り上げるため、特定の地域についてではなくエイサーの一般論的な視点で考察していく。

---

[24] 松田一利さんへの取材調査（メール文面にて 2020 年 10 月 22 日実施）より。
[25] エイサーで道ジュネー中、他の団体とかち合った際に激突競演することをいう。相手の演奏・演舞に引き込まれないよう、三線・太鼓をより一層かき鳴らし演技を競う。最近では、これを見に観光客が集まるほど人気が高まっている。
[26] 松田一利さん（メール文面にて 2020 年 10 月 22 日実施）ならびに眞榮平剛士さん（メール文面にて 2020 年 10 月 1 日実施）への取材調査より。

佐喜眞（1925）による記録に「7 月 17 日は新城[27]の島には何もなかつたが、他の島ではエイサーと稱する盆踊があつたので、若い男女は此見に出掛けた」とあることから、自分のシマにエイサーがなければ他のシマまで見に行くということが戦前から既に行われていたことが分かる。つまりはシマ内で行われる儀礼を外からの見学者が観るという行為が当時から許容されていたのである。このことからエイサーは閉鎖的な秘祭が多く存在する琉球信仰としては例外的に、当時から比較的外部にも開かれた形で行われる儀礼であったといえる。

沖縄エイサー研究部の島袋幸司代表は、そんな特色を持ったエイサーに対して、明治期から品評会の開催などといった依頼が行政から入っていたため、エイサーは外へ見せる対象のものへとその姿を変えていったのではないかと推測している[28]。当時の様子について、久万田（2011:204-205）は次のように論じている。

> 「近年のかなり早い時期から、エイサーはムラの青年によって担われ、ムラの旧盆行事を中心として踊られてきた。それが、いつ頃から盆行事以外でも踊られるようになったかを示す資料はそれほど多くない。現在の沖縄市近辺のエイサーに関する新聞記事によると、明治 40 年代には知花、西原、越来、胡屋（引用注：現在の沖縄市にある諸部落）などでエイサーが踊られていたことが確認できる。また当時は集落の盆行事以外にも、物産品評会や展示会の余興として踊られたことがわかる。以下にその事例をいくつか挙げてみる。
>
> ・明治 39（1906）年 10 月 8 日 中頭郡重要物産品評会並展覧会 美里間切[29]知花・西原両村のエイサー（七月ヤイサー）が他の民俗芸能とともに出演。
> ・明治 40（1907）年 9 月 16 日 越来間切品評会並び展覧会 胡屋村エイサー、越来村エイサーが他の民俗芸能とともに閉会式後の余興として出演。
> ・明治 44（1911）年 9 月 25 日 中頭郡重要物産品評会及び教育品展覧会の余興として越来村エイサー（七月ヤイシャー）が他の民俗芸能などとともに出演。
>
> このように、行政主導の催しへのエイサー参加が既に明治末には行われていたことがわかる。」

一等最初のエイサーは旧盆期間中のみに地域内だけで行われる宗教的行事で、いたって簡素な歌と踊りで構成されており、外部に公開されるものではなかった（あるいは公開する

---

27 現在の宜野湾市にある字。
28 島袋幸司さんへの取材調査（メール文面にて 2020 年 11 月 3 日実施）より。
29 琉球王朝時代から 1908（明治 41）年に島嶼町村制が施行されるまでの間、沖縄で用いられていた行政区分。ウチナーグチ（琉球語）では「マヂリ」という。美里間切は現在の沖縄市東部（旧美里村域）にあたる。

必要がなかった)。しかし、各地で品評会をはじめとした行政介入の会合が実施され始め、それにエイサーを演舞する青年会が参加したことによって規模が徐々に大きくなり、踊る季節や披露する対象の範囲も拡大させていったのである。それと同時に歌・踊りに関しても外部の人間に見せることを意識するようになった。エイサーを担う青年達は自身の演舞技術の向上を図り、より見ごたえのあるものを追求したのである。このような変容は、起こった時期こそ地域間で差異が生じていて一概に論じることが困難であるものの、共通しておおむね次ページに示す表 2 のような過程を経たものと考えられる。

【表 2】明治～昭和（戦前）期にかけてのエイサーの変容過程

	開催季節	開催場所（範囲）	様相
地域内の宗教的な行事	旧盆のみ	地域内	簡素な歌と踊り
↓	↓	↓	↓
地域外の見学者も受け入れる公開型の行事	旧盆のみ	地域内	鑑賞に堪えうる芸術化
↓	↓	↓	↓
トゥイケーによる他村と公開・交流が始まる	旧盆 or その前後	地域内外	外部で披露するための技術追及
↓	↓	↓	↓
行政主催イベントへの出演	旧盆 or その前後	地域内外	大人数へ披露するための技術発展

※島袋幸司さんへの取材調査（メール文面にて 2020 年 11 月 3 日実施）をもとに作成

行政主導での品評会が行われるようになった背景としては、1908（明治 41）年に沖縄で町村制が敷かれ、それまでの間切番所に代わって役場が設置されるようになった前後から、行政側も自らの管轄する村において旧盆儀式であるエイサーがどのような形で行われているのかということについて関心を寄せるようになったものと想像される。

この風潮が引き金となってエイサーの見せる対象が旧盆の先祖霊、無縁仏、島人（しまんちゅ）（地域住民）から他島人（たしまんちゅ）、他地域の青年会へと拡大した。それとともにトゥイケーによる青年会間の演舞交流が始まったことでオープンな宗教的儀礼になっていき、それが次第に芸能・イベントとしての性質を持ち始めるようになったものと考えられる。

ちなみに、このような大変容を遂げたエイサーだが、かつての宗教色の濃い演舞が今も残るのがうるま市平敷屋（へしきや）青年会のエイサーである[30]。同エイサーは 1904（明治 37）年に当時の青年会長が沖縄島北部の名護からエイサーを習い覚えてきてこの地に伝えたのが始まりとされている(岡本 1994)。現在、多くの青年会は住民からの寄付金で活動を行っているが、同青年会はかつての酒瓶担（ささがみかた）みやー（酒がめを担ぐ役割の人）が酒をもらいながら道ジュネー

[30] 松田一利さんへの取材調査（メール文面にて 2020 年 10 月 22 日実施）より。

するという形を現在でも守っている[31]。この他にも、履物は履かずにお坊さんのような衣装を纏い、大太鼓なしのパーランクーだけで演舞されるという、他の青年会にはない素朴なスタイルを貫いている。

5-2. 戦後～芸能・イベントとしての変容～

戦後、すべてを失った沖縄の人々が真っ先に取り戻したのが歌であった。彼らはがれきの中から空き缶や木材、落下傘の紐などを集めてカンカラ三線を作り、各地でそのうら寂しい音色が響いた。金武町屋嘉の収容所では戦後初の民謡として『PW 節[32]』が生まれた。

1945（昭和 20）年 11 月 7 日の屋嘉収容所閉鎖とともに捕虜が釈放されると、歌に続いて芸能の復興運動が活発化した。当時の芸能関係者たちは舞台で使用する大道具・小道具をあるものの中で一から作った。頬紅にはレンガを砕いた粉、白粉には胃腸薬が使われたという。困難な状況下でも知恵の限りを尽くした結果、戦後最初の舞台として島袋光裕[33]が実に 5 千人を超える観衆を前に『かぎやで風[34]』を披露した（ビセ 1998）。このようにして蘇った芸能が、焼け野原から驚異的な勢いで復興を成し遂げた沖縄人の原動力となったに違いない。

エイサーに関しては、青年会活動を含む一切の活動が戦争によって休止を強いられたことは言うまでもないが、終戦を迎えた直後に早速エイサーを復活させた地域がある一方で、戦前に生活拠点があった部落が米軍基地として収用されたこと、戦没者多数のため指導者が不足したことなどを背景に戦前と同様のエイサーの復活に困難を極めた地域もあった（唐木 2010）。

この頃、嘉手納基地の東側に位置する越来村[35]は基地依存経済の中で商業都市として発展してきたが、米国民政府によるオフ・リミッツ[36]が敷かれたことによって商工業者が大ダメ

---

31 松田一利さんへの取材調査（メール文面にて 2020 年 10 月 22 日実施）より。

32 1945（昭和 20）年当時、屋嘉収容所の演芸部長であった元那覇市役所職員の金城守堅が作詞したもの。PW は捕虜という意味の英語”Prisoner of War”の頭文字を取ったもので、戦後間もない頃に人々が強いられた惨めな暮らしを今に伝える一曲として現在でも歌い継がれている。1937（昭和 12）年に発表された普久原朝喜の『無情の唄』のメロディーに乗せて歌われたため、現在では『PW 無情』という呼び名が普及している（ビセ 1998）。

33 1893（明治 26）年 6 月 1 日、那覇生まれ。地元新聞の芸能記者から舞踊の道に入った。二才踊りの『高平良万歳』を得意とし、組踊では『執心鐘入』の座主役、『大川敵討』の満名の子役で人気を博す。1956（昭和 31）年には那覇に琉舞研究所を設立し、指導者としても尽力。沖縄俳優協会会長、沖縄芸能協会会長を歴任した他、石扇の雅号で書家としても知られた。1987（昭和 62）年 9 月 7 日、満 94 歳にて没。

34 祝宴の席で演奏・演舞される、琉球古典音楽の代表的な楽曲の一つ。

35 かつて沖縄島中部にあった村。1956（昭和 31）年に市制施行されコザ市と改称。さらに 1974（昭和 49）年、隣の美里村と合併して現在の沖縄市となった。

36 民間地域への米軍の立ち入りを禁止する措置。治安や衛生上の理由が主だが、復帰前は反米的な民衆運動を弾圧する手段としてもたびたび利用された。経済的締めつけにも効果があったという（琉球新報社編 2003）。

ージを受けることとなった。市民が希望を失いかけ、暗いムードになっていた折にかつてこの地で盛んに行われていたエイサーで元気を取り戻そうという理念のもと、地元商工会が中心となって、越来村がコザ市と改められた 1956（昭和 31）年に「第 1 回全島エイサーコンクール」が開催された（沖縄市企画部平和文化振興課編 1998）。これは全琉の青年会が一堂に集結して自慢の演舞を競い合う、当時としては画期的な祭典であった。1976（昭和 51）年からは「全島エイサーまつり」と改められ、地元民以外のより幅広い層にも楽しめるような祭典にリニューアルした。のちに沖縄市が「エイサーのまち」と呼ばれるようになるきっかけともなったイベントである。

このエイサーの一大イベントによってエイサーの性質にも大きな変化がもたらされた。沖縄島中部地域を中心とした青年会が上位入賞を目指して切磋琢磨するようになった。衣装や踊り、楽曲に至るまでの演出に様々な工夫を凝らし、芸能性が顕著になった。謝苅青年会においても「3-3-2.エイサー演舞」で取り上げたようなオリジナル楽曲の制作などから、他の青年会との競争心が強まっていったといえる。同青年会の元地謡・松田一利も青年会同士の競争が活発化する中で「どうせなら他地域の地謡よりも上手く歌えるようになりたい」と感じるようになり、結果としてそれが松田弘一の門をたたいて本格的に民謡界入りするきっかけになったという[37]。

また、いわゆる「沖縄ブーム[38]」による観光客の増加に伴い、エイサーは彼らの興味の対象となり、観光施設で演舞される機会も急増した。このような娯楽の場でのエイサー演舞の様子がマス・メディアで取り上げられ、それが日本国内外に発信されることになった。

さらに、海外におけるエイサーも時を同じくして変容を遂げている。例えば、ハワイにおいては 19 世紀末以降に渡った沖縄県系移民によって、1930 年代までに現地で手踊りエイサーが伝えられており、長年それが演舞されてきた。しかし、1980（昭和 55）年のハワイ移民 80 周年を記念して浜比嘉島出身の松本常祥によってパーランクーを用いたエイサーがもたらされた。それを皮切りにホノルル市を中心に創作エイサー団体が相次いで新設され、エイサー踊りが大きな広がりを見せていった（久万田 2010:234-237）。

5-3. 青年会と地域社会の変容

沖縄において青年会がいつの時代から組織され、地域社会の一端を担うステークホルダーとなっていたのかということに関しては明確な記録がなく判然としないところがある。

---

37 松田一利さんへの取材調査（メール文面にて 2020 年 10 月 22 日実施）より。

38 文化としての沖縄ブームに関しては、過去 3 期に分けて日本国内に到来したと筆者は考える。第 1 期は 1972（昭和 47）年 5 月 15 日の復帰後に始まったブーム。復帰直前のルポライター・竹中労（ろう）による沖縄音楽の PR 活動に加え、1975（昭和 50）年の海洋博などの国策的な要因が当ブームの火付け役になったと考えられる。第 2 期はバブル経済ならびに 1992（平成 4）年の首里城再建、同年に発表された THE BOOM の楽曲『島唄』のヒットによって、第 3 期は 2001（平成 13）年度に放送された NHK 朝の連続テレビ小説「ちゅらさん」によってそれぞれもたらされたブームである。これに関しては唐木（2010）も同様に 3 期に分けた説明をしているが、期間の分け方が筆者のものと若干異なっている。

ただ、「2-2.起源・歴史」で述べた風俗改良がきっかけで青年会が今まで毛遊びで歌っていたような民謡を取り入れて、地域性のあるエイサーを演舞するようになったといわれている。これから各部落のエイサーに地元青年会が携わるようになったのである。

その後、戦後復興や日本復帰を引き金に沖縄県内では「本土並み」を目指す地域改革が国家主導で施された。教育の観点でも学力問題が提起された。復帰によって琉球大学が日本国立に移管されるとヤマトからの受験生が増加し、彼らと対等な学力が要求されるようになった。山城（2007:77）は学歴偏重の風潮は青年会の弱体化にもつながってしまったことを示した上で、「青年会でエイサーをすることに対して、大人の意識にも変化が表れ、エイサーしかやらないことを否定的な意味を込めて『エイサー青年会』と呼ぶ時期さえあった」と論じている。

このようにすっかりヤマトにキジャーサレた（かき回された）中でも、地域の文化的価値を伝承する組織として地域の共同性と切り離せない存在である青年会は、地域文化の担い手としての誇りを持ち、その役割を果たし続けた。青年会がエイサー演舞の傍ら、「3-3-1.青年会活動」や「4-2.青年会が持つ地域間交流のパイプ」で述べたような後輩育成やボランティア活動に力を注いで本格的に行うようになったもこの頃からで、その根底にはより地域社会に根差し、社会的にも認められる担い手でありたいという思いのもとで始められたものであると考えられる。

6. エイサーの課題と今後

エイサーの抱える最大の課題は、青年会員の減少である。青年会のメンバー数が少なすぎてエイサーができない、さらには青年会活動そのものが休止になっているという地域が少なからず存在するのも現状だ[39]。

その一方で、先述の沖縄観光ブーム等もあってエイサーの知名度や認知度は全国的にも高まりつつあり、創作系の団体も全国各地に誕生したり県外の学校教育でもエイサーが取り入れられたりする事例も見られるようになった。

このようにエイサーの認知度があがるにつれ、青年会による伝統的なエイサーを観光資源として活用していこうという動きがあるなど、エイサーがコンテンツとしての盛り上がりを見せている[40]。

以上のことからも、エイサーの今後を語るうえで青年会メンバーの減少という課題を解決することが重要だと考えられる。青年会が無くなれば芸能イベントとしてだけでなく、旧盆行事・文化としてのエイサーまで消滅することになる。そして、青年会の存在は今まで論じてきた通り、エイサーの継承だけでなく、その地域の活性化にも欠かせない存在である。

青年会員を増やすためには、今後いかにして地域（自治会）と教育（学校）、青年会との

[39] 例えば、糸満市米須青年会は 2017 年度に会員数が過去最少の 5 人にまで落ち込み、存続に向けて他地区からのエイサー参加希望者の受け入れを行った（沖縄タイムス 2017 年 8 月 17 日付朝刊 22 面）。

[40] 眞榮平剛士さんへの取材調査（メール文面にて 2020 年 10 月 1 日実施）より。

連携を密にしていくかが重要となってくると考えられる。

また、青年会以外の場においては今後ますますエイサーは広がりを見せていくと予想される。それと同時に何となくエイサーを踊っているが、歴史や由緒は知らないという人も増えてしまうことが懸念される。だからこそ、この奥深いエイサー文化を後世にしっかりと伝承していく必要もあるだろう。

7. おわりに

7-1. まとめ

本論文は、戦後の沖縄において特に積極的に新たなエイサーの創造を行ってきた謝苅青年会を中心に、青年会活動の現状やエイサー演舞の特徴、青年会やエイサーと地域社会との関係性を調べ、エイサーが現在のような形にまで変容を遂げた歴史的背景について明らかにした上で、今後のエイサーの発展について考察することを目的とした。

一等最初は先祖霊を供養する地域の宗教儀礼として行われていたエイサーだが、時代とともにより幅広い層に見せる芸能としての顔を持ち始め、イベント性を兼ね備えるようになっていった。現在では今回論じた謝苅青年会を始め、沖縄県内 400 を超す青年会がそれぞれ伝統を継承しながらも特徴を持ったエイサーを創作し、互いに切磋琢磨している。

念仏踊りが首里に伝わり、それがエイサーとして全琉へ伝播していったのは約 400 年前のことであるが、その後エイサーは直近の百数十年の間で大きな変容を遂げたわけである。この変容については「宗教的儀礼としての変容」「芸能・イベントとしての変容」「青年会の変容」の大きく 3 つの視点に分けて論じてきた。

宗教的儀礼としては 1900～1910 年頃（明治 40 年前後）に行われた品評会が変化をもたらす要因になった。時代としては琉球王朝時代から続いた間切という地域区分が廃止され、沖縄でも日本と同様の町村制が敷かれる前後のことである。町村役場として装いも新たになった行政がそれまで当たり前のように行われてきた地域の祭祀に関心を抱き、結果としてこのような品評会を開催する自治体が出てきた。これを機にエイサーがその「見せる対象」の幅を広げていき、最終的には地域内外とかかわりを持った芸能・イベントとして行われるようになっていった。

明治末期から徐々にイベント要素を持ち始めたエイサー。そのイベントとしての在り方も先の戦争を機に大きく変わった。戦後、すべてを失った沖縄の人々が真っ先に歌と芸能を取り戻し、それを復興の原動力とした。のちに「エイサーのまち」として知られるようになる沖縄市の前身・コザ市は当時、めざましい復興を遂げてもなおアメリカに翻弄され続け、暗いムードになっていた。そこに登場したのが「全島エイサーコンクール」である。全琉の青年会が繰り広げる活気ある演舞の競合に観衆は手に汗握った。この祭典によって人々が笑顔と覇気を取り戻すのみならず、各青年会も他所シマのエイサー負けるまいと様々な工夫を凝らした演舞を創造し、旧盆恒例の芸能であるエイサーは一層勢いを増した。

エイサーのコンテンツとしての成長と時を同じくして、沖縄ブームが到来。これに際して

エイサーも沖縄文化を感じられる芸能としてマス・メディアで取り上げられる機会が増加した。かくして沖縄以外の地域にも広く拡散されたエイサーは現在、日本国内のみならず海外にも演舞団体が作られ、その広がりは留まるところを知らない。

沖縄においてエイサーを担う青年会もここ数十年の間で変化を見せた。「本土化」の風潮に飲まれる沖縄世間（うちなーしきん）の中でも先人より受け継いだ地域文化を守り継ぎたいという思いのもと、より地域社会に根差し人々に認められる青年会としていく取り組みがなされるようになった。例えば若手育成の強化や町内の環境維持活動、地域密着型の会合への出演などを通して青年会は地域住民をつなぐパイプとしての役割を担うようになったのである。

以上から、エイサー文化は激動の時代の中でも若者たちの継承に対するたゆまぬ思いと尽力によって形を変えながら今日まで営まれてきたと考察できる。時代の転換点で絶えず新たな在り方が生まれてきたが、その一方で先人から伝えられた伝統も変わることなくエイサーの一端として存在し続けている。

今後、さらにエイサー演舞に従事する人の層が広くなることが予想される。現在の我々には想像もつかないような新しいエイサーが創作されるかもしれない。そんな中でも数百年に及んでエイサーという儀礼・芸能の中心で温められ続けてきた古来からの一面が忘れ去られ消滅してしまうことがないよう、伝承により一層の力が注がれるべきであると考える。

7-2. 謝辞

本論文の執筆にあたり、メール文面での取材調査ならびに資料提供にご協力いただきました民謡歌手の松田一利さん、沖縄市エイサー会館職員の眞榮平剛士さん、沖縄エイサー研究部代表の島袋幸司さん、北谷町謝苅区自治会長の徳里徹さん、コロナ禍に対応したリモート調査の仲介をしていただきました沖縄市音楽資料館おんがく村の砂川由美子さんにこの場を借りて厚く御礼申し上げます。ご多忙の中貴重なお時間を割いていただき、本当にありがとうございました。

また、研究と執筆に関してご指導いただきました指導教員の宮内泰介先生をはじめ、ゼミにてご指導いただきました笹岡正俊先生ほか地域科学研究室の先生方、激励くださった先輩方、共に執筆に励んだ同期生の皆様にこの場を借りて心より感謝申し上げます。

8. 引用・参考資料

【文献】

井谷泰彦,2013,「モーアシビ（毛遊び）と風俗改良運動に関する一考察」,『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』20(2):129-140

井谷泰彦,2014,「戦後沖縄におけるエイサーの変容と青年会」,『東アジア社会教育研究』19:223-232

大城學,1996,『沖縄新民謡の系譜』ひるぎ社

岡本純也,1994,「民俗舞踊の伝承の場における創作について――沖縄県勝連町平敷屋のエイサーを事例として」,『民俗芸能研究』20:41-64

沖縄市音楽資料館おんがく村編,2018,「松田弘一インタビュー」（同資料館所蔵資料）

沖縄市企画部平和文化振興課編,1998,『エイサー360 度：歴史と現在』沖縄全島エイサーまつり実行委員会

唐木健仁,2010,「沖縄・八重山諸島における沖縄芸能”エイサー”の地域性―各集落における芸能の機能を中心に―」,『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』11:175-199

宜保榮治郎,1997,『エイサー：沖縄の盆踊り』那覇出版社

久保田秀樹,2011,「エイサーとともに歩む：沖縄の青年会より」,『社教情報』64:4-6

久万田晋,2011,『沖縄の民俗芸能論：神祭り、臼太鼓からエイサーまで』ボーダーインク

国立国語研究所編,2001,『沖縄語辞典』第 9 刷,財務省印刷局

小林公江,2010,「沖縄県名護市名護地区のエイサーと本部町瀬底エイサーとの関係」,『関西楽理研究』27:1-16

小林公江・小林幸男,2002,「名護市の手踊りエイサー――本部町・今帰仁村との比較を通してー」,『関西楽理研究』11:19-32

小林公江・小林幸男,2013,「沖縄県本部町の手踊りエイサー：伝承の概要と音楽的特徴」,『京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要』26:43-68

佐喜眞興栄,1925,『シマの話』郷土研究社

島袋幸司,2010,「エイサーの持続と変化に関する動態的研究」（沖縄国際大学大学院地域文化研究科修士論文）

田淵愛子,2003,「エイサーの伝承に関する考察――沖縄市園田（そんだ）青年会のエイサーのフィールドワークを通して」,『ムーサ：沖縄県立芸術大学音楽学研究誌』4:93-104

塚田健一,2019,『エイサー物語：移動する人、伝播する芸能』世界思想社

ビセカツ,1998,「戦後オキナワ音楽史 1945-1998」,藤田正編『ウチナーのうた』音楽之友社,pp.183-193

山城千秋,2007,『沖縄の「シマ社会」と青年会活動』エイデル研究所

与那嶺江利子,2005,「エイサーにみる青年会活動とその展開」,『沖縄市立郷土博物館紀要あやみや』13:42-72

琉球新報社編,2003,『最新版沖縄コンパクト事典』琉球新報社

【新聞記事】

沖縄タイムス「エイサー参加者募集／糸満米須区　青年会員が減少」2017 年 8 月 17 日付朝刊 22 面

【Web サイト】

「エイサー会館」
<https://eisa-museum.jp/> , 2020 年 12 月 20 日最終閲覧

「エイサー豆知識 | 沖縄市観光ポータル | KozaWeb」
<https://kozaweb.jp/eisa/mame.html> , 2020 年 12 月 20 日最終閲覧

「沖縄全島エイサーまつり実行委員会オフィシャルサイト」
<https://www.zentoeisa.com/> , 2020 年 12 月 20 日最終閲覧

「住民基本台帳法による世帯人口表　北谷町公式ホームページ」
<http://www.chatan.jp/smph/choseijoho/tokei/jinko.html> , 2020 年 12 月 20 日最終閲覧

「松田弘一・特別インタビュー 1 [毛遊び]編」
<https://ryuqspecial.ti-da.net/e1755430.html> , 2020 年 12 月 20 日最終閲覧

「リモートエイサー祭」
<https://eisaokinawa.localinfo.jp/> , 2020 年 12 月 20 日最終閲覧

【映像】

有限会社キャンパス,2007,『エイサーOKINAWA 北谷謝苅編』（DVD）

9. 付録「謝苅エイサーの楽曲」[41]

9-1. 北谷村（ちゃたんむら）

作詞・作曲／松田弘一

【歌詞】	【大意】
一、昔懐（んかしなち）かさや　北谷（ちゃたん）トンネルに 姉小歌乗（あぶぐぁうたぬ）してぃ　二才（にいせー）が舞方（めえかた）	一、昔懐かしいことよ　北谷トンネルで お姉さんが歌を乗せて　青年が踊り手
二、稲穂（いなふ）ゆさゆさとぅ　名（な）に立（た）ちゅる田（た）ぶく 如何（いちゃ）し名（な）ぬ朽（く）ちゅが　肝（ちむ）に残（ぬく）てぃ	二、稲穂ゆさゆさと　名高い田んぼ どうして名が朽ちようか　心に残っていて

【解説】謝苅青年会で地謡を務めていた松田弘一が 21 歳時分、謝苅エイサーのために作詞・作曲し、現在でも同青年会の入場曲として用いられている楽曲。戦前の北谷の原風景を歌っており、北谷トンネルは全天候型で歌声もエコーが効いてよく響くため、毛遊（もうあし）び場所の一つだったという。戦後になって山が削られて跡形も無くなってしまったが、おおよそ現在の謝苅交差点（国道 58 号と県道 24 号の交点）付近にあったようだ。

9-2. 仲順流（ちゅんじゅんなが）り

【歌詞】	【大意】
仲順（ちゅんじゅん）流りや　七流（ななが）り 黄金（くがに）ぬ彩橋（あやはし）ん　七彩橋（ななあやはし）	仲順部落の川の流れは　七つの流れ 色鮮やかな橋も　七本架かっている

【解説】13 世紀半ば頃の北中城村仲順にいた豪族・仲順大主（ちゅんじゅんうふしゅう）について歌ったものと伝わる。歌詞の内容を直訳に近い形で表すと上記のようになるが、仲順大主の家系が反映していく様子をいくつもの川の流れや美しい橋の姿に例えて表現したものではないかと筆者は考える。ちなみに「黄金ぬ綾橋ん　七綾橋」は謝苅青年会にて採譜されている歌詞であり、現状では「黄金ぬ囃子（はやし）ん　七囃子（ななはやし）」という歌詞が広く歌われている。

9-3. 久高（くだか）

【歌詞】	【大意】
一、久高万寿主（くだかまんじゅうすう）や　美（ちゅ）らユーベー とぅめえてぃてぃんどー　ヨー玉黄金（たまくがに） 今宵（くゆい）ぬ話（はなし）ぬ　面白（うむっ）さ	一、久高島の長生きな主人は　美しい妾を 探しているってよ　ねえ可愛子ちゃんよ 今宵の話の　面白いことよ
二、我達（わったー）が若（わか）さたいねえ　首里那覇（すいなーふぁ）ん たっちきむっちき　ヨー玉黄金（たまくがに） 今宵（くゆい）ぬ話（はなし）ぬ　面白（うむっ）さ	二、私達が若い頃は　首里・那覇間を 何度も行き来したよ　ねえ可愛子ちゃんよ 今宵の話の　面白いことよ

【解説】高齢にもかかわらず女好きな役人を揶揄した内容の歌。権力者を皮肉るあたりがいかにも遊び心にあふれており、ユーモラスな一曲である。

---

[41] 全曲、筆者が DVD「エイサーOKINAWA 北谷謝苅編」より歌詞を聞き取り、日本語訳を付けた。なお、歌詞の解釈と解説文の作成に関しては、一部において松田一利さんへの取材調査（メール文面にて 2020 年 10 月 22 日実施）の内容を参考にした。

9-4. 花ぬ風車（はなかじまやー）

【歌詞】	【大意】
花ぬ風車や　風連りてぃ巡る	花の風車は　風を伴って回る
我身ん里行逢てぃ　今どぅ戻ゆる	私も彼と出会って　今戻る

【解説】もとは沖縄で広く親しまれる童歌の一つ。エイサーの他、カジマヤーユーエー[42]でもよく歌われる。

9-5. ダイサナジャー

【歌詞】	【大意】
一、東方ウスメー　藁サナジかきてぃ	一、東の方の爺さん　藁のふんどしをつけて
目くすたいかんてぃ　芋煮また前なち	目くそを垂らして　芋煮を前にして
イラヨー　ダイサナジャー小	ふんどしを垂らしただらしない奴め
へイヨー　シュラヨー	
二、あんまさみウスメー　アチビうさがゆみ	二、具合悪いの爺さん　軟飯を召し上がりますか
あねるアチビ臭さぬ　誰がまた喰ゆが	あんな軟飯臭いのに　誰が食うか
イラヨー　ダイサナジャー小	ふんどしを垂らしただらしない奴め
へイヨー　シュラヨー	

【解説】本来は爺さんと女の掛け合い歌として歌われる。「ダイサナジャー」は直訳すると「ふんどしを垂らした人」となり、つまりは「だらしのない人」といった感じのニュアンスである。年寄りをからかっているような印象を与える歌だが、かえって親しみを込めてこその表現であるのかもしれない。

9-6. 今帰仁ぬ城（なちじんぐしく）

【歌詞】	【大意】
今帰仁ぬ城ヨンサー　霜ないぬ九年母	今帰仁城の　季節外れのクネンボ（柑橘類）を
志慶真乙樽がヨンサー　ぬちゃいまたはちゃい	志慶真部落の乙樽（女性の名）が　抜いて飾って

【解説】13 世紀の三山時代、今帰仁城に側室として迎えられた絶世の美女・乙樽のことを歌った歌。一説に「季節外れのクネンボ」は年老いて生まれた子供のことを指すとも。現在でも手踊りエイサーが残る沖縄島北部・今帰仁方面から全琉へと伝播した楽曲である。

9-7. テンヨー節（ぶし）

【歌詞】	【大意】
一、東明かがりば　墨習れが行ちゅん	一、東の空が明るくなれば　学校へ行く
頭結てぃ給り　我親がな加那志	頭を結ってください　私の親御様
テンヨー　テンヨー　シトゥリトゥテン	

[42] 沖縄における数え年 97 歳の生年祝いで、一般的には旧暦 9 月 7 日に催される。祝われる人は風車を持って集落内をオープンカー等でパレードする。沖縄ではこの年になると子供に戻ると信じられているために風車を持たせるとも、生前の模擬葬式の意味合いを込めたものであるとも言われている。

二、今日や遊び明日や　寝んだわん良たさ
如何し此ぬ遊び　投ぎてぃ我ね行ちゅが
テンヨー　テンヨー　シトゥリトゥテン

二、今日は遊んで明日は　寝てしまってもいいよ
どうしてこの遊びを　投げて行くものか

【解説】「テンヨー節」は囃子言葉から付いた題名で、語意は判然としない。囃子言葉なのでこれといった意味を持たないという意見もある。一般的には「待ちかにてぃ居たる　七月んけえなてぃ（待ちかねていた　七月になって）…」から始まる歌詞でよく歌われる。

9-8. エイサー頭

作詞・作曲／松田一利

【歌詞】

一、七月になりば　島ぬ二才達がはい揃てぃ
隣村までぃん　わさみかち
我んね北谷謝苅　エイサー頭

二、太鼓んドンドンどんみかち
北谷謝苅とぅん巡てぃ
家族ぬ数々ぬ　繁昌願ら
我んね北谷謝苅　エイサー頭

【大意】

一、旧盆になれば　村の青年達が勢揃いして
隣村までも　ざわめかせて
私は北谷謝苅の　エイサー団のリーダー

二、太鼓もドンドンと響かせて
北谷謝苅を回って
家内の様々な　繁盛を願おう
私は北谷謝苅の　エイサー団のリーダー

【解説】松田一利によって作詞・作曲された謝苅青年会のオリジナル楽曲。旧盆の活気ある様子がありありと伝わってきて、いわゆる新民謡としても大きな人気を博する一曲。

9-9. 謝苅イマサンニン

【歌詞】

一、謝苅太陽昇てぃ　寝んだりみ太陽
イマサンニン
街並ぬ美らさ　他所に勝てぃ
イマサンニン
サー側ナリナーリー　思やがチョンチョン
愛しがチョンチョン　今チョンチョン

二、音に響まりる　謝苅エイサーやしが
イマサンニン
我した若者や　守てぃ行かな
イマサンニン
サー側ナリナーリー　思やがチョンチョン
愛しがチョンチョン　今チョンチョン

【大意】

一、謝苅の太陽が昇って　寝ていられるか太陽め
街並みの美しさは　他所に勝っている
さあそばへ来い　恋人が来ている
愛しい人が来ている　今来ている

二、音に聞く　謝苅エイサーだけど
我々若者が　守っていこう
さあそばへ来い　恋人が来ている
愛しい人が来ている　今来ている

【解説】もとは毛遊びでよく愛唱されてきた民謡曲。「イマサンニン」は稀に「今三人」という字が当てられることがあるが、具体的にどんな意味を持つのかははっきりしておらず、『テンヨー節』同様に意味のない言葉であるという見解を呈する者もいる。

9-10. 唐船(とうしん)ドーイ

【歌詞】	【大意】
一、唐船(とうしん)ドーイさんてーまん 一散走(いっさんば)えならんしや　ユイヤネ 若狭町村(わかさまちむら)ぬ　サー瀬名波(しなふぁ)ぬタンメー ハイヤセンスル　ユイヤネ	一、唐（中国）からの船が来たぞと叫んでも 一目散に走ることができないのは 若狭町村の　瀬名波（屋号）のお爺さん
二、あんしマクやてる 島(しま)や何処(まあ)が二才小(にいせーぐぁー)　ユイヤネ 島(しま)や中城(なかぐしく)　サー花(はな)ぬ伊舎堂(いしゃどう) ハイヤセンスル　ユイヤネ	二、あんなにやんちゃな奴め 生まれ故郷はどこだ青年よ 生まれ故郷は中城　華やかな伊舎堂だよ
三、流(なが)りゆる水(みじ)に　桜花浮(さくらばなう)きてぃ　ユイヤネ 色美(いるぢゅ)らさ広(ひる)さ　サー掬(すく)てぃ見(ん)ちゃね ハイヤセンスル　ユイヤネ	三、流れる水に　桜の花を浮かべて 色の美しいこと広いこと　掬ってみたのか
四、遊(あし)ばちん美(ちゅ)らさ 踊(うどう)らちん美(ちゅ)らさ　ユイヤネ うり産(な)ちぇる親(うや)や　サー神(かみ)がやたら ハイヤセンスル　ユイヤネ	四、遊ばせても美しい 踊らせても美しい あいつを産んだ親は　神であったのか

【解説】エイサーの締めくくりの定番。カチャーシー（お祝いの席での即興の踊り）でも親しまれ、沖縄民謡の中で最もポピュラーな楽曲の一つ。基本的に二番以降の歌詞はこれといったものが決まっておらず、場の雰囲気に応じて即興で歌われる。